

# 浜 私 幼

横浜市幼稚園協会 協会報 No278

公益社団法人 横浜市幼稚園協会 発行  
 〒221-0055  
 横浜市神奈川区大野町 1-25  
 横浜ポートサイドプレイス アネックス 5F  
 電話 045 (534) 8708  
<http://www.kids-yokohama.or.jp>  
 編集 横浜市幼稚園協会広報部  
 発行者 木元 茂  
 印刷所 株式会社横濱大氣堂

- ◆ 第57回横浜市幼稚園大会
- ◆ 第59回神奈川県私立幼稚園教育研究横浜地区大会 開催

## 「未来に向かって 子どもが主役の幼児教育を」

令和2年1月25日(土) 神奈川県民ホール 大ホールほか

令和2年1月25日(土)、第57回横浜市幼稚園教育研究大会、第59回神奈川県私立幼稚園教育研究横浜地区大会が神奈川県民ホールの大ホール他で開催された。開会式、全体会は横浜市内の幼稚園、こども園の教職員のほか、保護者、多くの来賓が参加し盛大なものとなった。

開会式では、運営実行委員長代理として、岩本勉神奈川県私立幼稚園連合会副会長ならびに実行委員長である木元茂横浜市幼稚園協会会長から挨拶があり、続いて、来賓を代表し、荒木田百合横浜市副市長、松尾誠司神奈川県福祉こども未来局こどもみらい部私学振興課長より祝辞をいただいた。

横浜市こども青少年局保育・教育人材課長から、横浜市において、横浜市子ども・子育て支援事業計画に基づき、「子どもの最善の利益」が実現されるよう、乳幼児期の子どもの育ちを担う保育・教育施設の関係者間において保育・教育の質の確保・向上のために方向性を共有することが重要となっていることから、3月の公表を目指して現在策定中である「よこはま☆子ども宣言(仮称)」について、保護者を含めて多くの幼稚園関係者が集まるこの機会を活用して、その経過及び宣言の概要が説明された。



◆ 開会式の様子



▲木元茂氏 挨拶



横浜市幼稚園協会研究大会 全体会講演

## 角野栄子のちいさなどうわたち

講師／角野 栄子 氏〔童話作家〕



▲全大会で講演を行う角野栄子氏

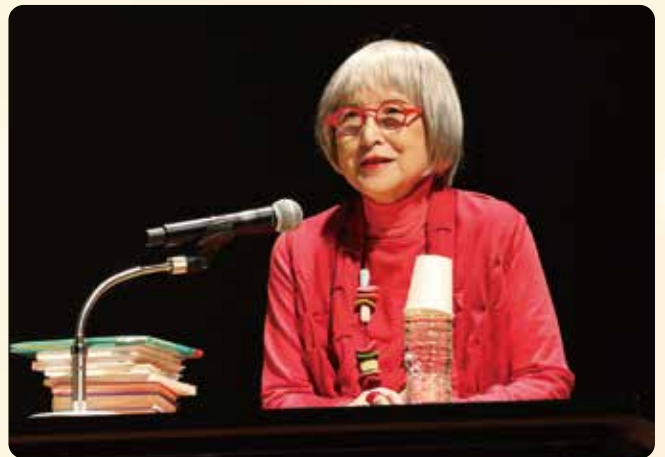
皆さん、こんにちは。客席の皆さんの顔が見えないので残念です。こんな沢山の方の前でお話しするのは初めてなので一人で負けそうです。このお話を頂いてから、幼稚園の時のことを何とか思い出しましたがあまり覚えてないんです。その頃、母が亡くなり訳も分からず、怯える毎日で泣いてばかりで本当に先生には困った子どもだと言われてるような子どもだったと思います。そんな幼稚園時代を送った私が子どもの物語を描く人になったんで、どんな風に子どもに接したらいいかなんて私は全く申し上げられないような気がします。

生まれた時、私も記憶にありませんけれども三つくらいの時の事を思うとやっぱり子どもってというのは、大人は元気が良く暴れ回ってなんか大泣きしたり大笑いしたりしてわかるような存在だと思いがちだけど、先生方は経験してらっしゃるから「そうじゃないわよ」というお気持ちは沢山お持ちだと思いますけど、子どもって物凄くよくわかっているんじゃないかと思うんですね。人間一生のエネルギーっていうのがあの小さな体にギュウと入っているんだと思うんですね。それを先生方がちょっと毎日子どもたちと接しながら持って生まれたエネルギーを少しずつ少しずつ開放して解き放してそして子どもたちが大きくなる。小さい時に持っていた子どもの素晴らしさっていうのは大人が尊敬すべきことだと思うんですね。子どもはいい加減に扱ってはいけない。手を掛ければいいって訳じゃないけど一つの存在としてやっぱり自分と同じ位の感受性を持って、やはりものは言わないけれどもわかっているんだって私は思って作品を書いているつもりです。

私が本を書くようになったのは、60年前にブラジルに行ったことがきっかけだった。帰って来てか

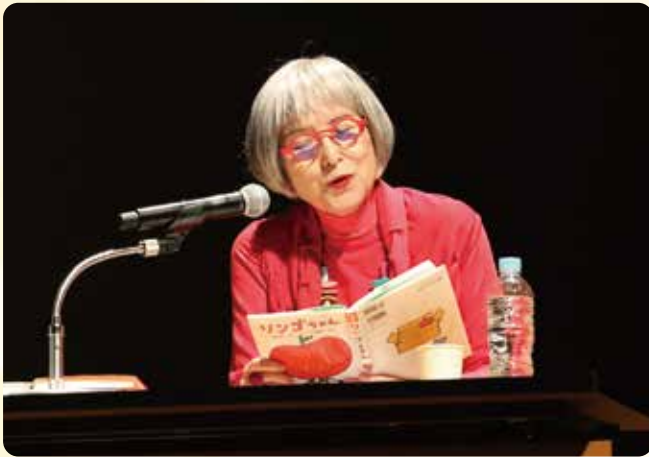
ら「ブラジルの経験を書いたらどうか」と大学の先生に言われたんです。それを書き始めた時に私は自分がこの書くということがすごく自分の心を開放してね。自分に自由をくれて生きていいんだって、書くっていうのはいままで書いたことがないわけですから下手なんですね。何回も何回も繰り返し書いているうちに私はこの仕事のものすごく好きだって発見したんですね。まるでコロンブスが初めて大陸を発見した時のようなそんな気持ちでした。それでこの本は頼まれたから書かなくちゃいけないけど、一生何かを書いていこうってその時思いましたね。

小さい時に父は私に話をしてくれました。父の言葉っていうのは江戸っ子でしかも落語が好きで講談が好きで歌舞伎も好きでそういう人が下町の口調で私に話してくれてその時々擬音が入る歌も入るわけですね。本も読んでくれる時その口調で読んでくれるんですね。私の言葉の元は父ではないかなあと思います。アンデルセン賞を頂きました時に賞はうれしいんだけど講演をしなくてはならなくて、私は日本の父から入ってきた「オノマトペ」という本について話をしました。「オノマトペ」というのはザーザー降るとか、ピョンピョン跳ねるとか、動作を音で表現することで言葉にもなるし、書くこともできるわけですね。自然と一体になって暮らしているの日本人は自然の音に対して敏感でそういった言葉を話すのが得意なんです。東南アジア方面も得意んじゃないかと思います。父がそういう風な言葉で私に話をしてくれたので私の文体もそういうことになっているだろうと思います。



物語と接するとき、小さいお子さんが自分で最後まで読めたその満足感っていうのは物凄く大事だと思います。大抵途中でやめちゃうんです。そうすると最後まで読めなかったっていう悔いが残るんですね。私の所に「今まで最後まで読んだことなかったけどこの本だけは最後まで読めました」っていううれしくてお手紙をくださるのね。そうになったら読書というものが最初の段階になったのだと思う。今の子どもはたくさん読んでもらっているのだから読んだ気持ちになってしまう。だけど自分で終わりまで読むって

うのが大事でその橋渡しみたいなものが難しいんですね。たくさん読んだつもりになっていてもそれは聞き書で読書でない。橋渡しをする時に逢う物語が私はとても大事だと思う。子どもたちが心を吸い寄せられるようなものがとても大事で、そこらへんで私は慰められたし自分で書いていて面白いのでたくさん幼年物は書いています。主人公がとても大事でひいきしたくなったり、一体化したり、一緒に歩いているような気持ちになったりね、生活とファンタジーみたいなものがない交ぜになっている本が面白い、子どもたちの心を引き付けるんじゃないかとそんな本を私は書いています。



幼年童話は文字は書いてあるが目に見える表現で書かなくてはいけないんです。だから私は絵を見せないで読む。絵がなくても目に見える情景の中に子どもがどれだけ入っていけるか身をもって感じているわけです。言葉は音があると形に風景になりそして読んだら一人一人の物語になり読んだ後に物語と一緒に考えたり想像したり遊びを作ったり心が活性化して動く。そういうものを私は書きたい。

私の作品には一切テーマはありません。本のテーマを聞かれますがあなたが読んで感じたことがきっと私のテーマです。読んだものが一人一人違いますから自由な世界を描けます。一人一人が見えない世界を想像するのはとても大事なことです。赤ちゃんが毎日毎日見えない世界を想像して自分の生きる力をもらっている。そうして人は大きくなっていく。物語の向こうの世界、隠している世界は一人一人の中にある。それを自由に感じてほしい。テーマは一人一人て面白いワクワクする、もっと読んで欲しいと、心が動くことにより本を読みたくなるかもしれないし、絵を描きたくなるかも、何か作ってみたいくなるかも、走ってみたいくなるかも、そこで何か伝わってくる。そんな風になった時、物語が子どもたちの中に知らず知らずのうちに入ってくる。その人の辞書に言葉が出てくる。その人の言葉があることは素晴らしいこと、人と話しても自分の言葉で語られるエネルギー、ワクワク感を持っている物語を私は

大事に書いています。

ブラジルに2年暮らして、ヨーロッパを回ってリスボンに行きました。その時にリオデジャネイロから船に乗ったのですがアルゼンチンの人達が里帰りや旅行で沢山乗っていた。一番安い船だったので立派な人達ではないが食事がすむと沢山の人が甲板に出てきてフラメンコを踊るんです。最初は「パッパッパッパッ」とあるグループが「チャチャチャ」と違う音をたてる。また、違う音がすると「わあー」と音が重なると素晴らしい、まるでレース編みのようだったと思った。誰かが高い声で歌いだす月明かりの中、音楽ではあるけれど、ただの人たちが作るその音はなんて素晴らしいだろう。書く人になってない時ですが書くようになった時、言葉の音がすごく大事だということが染みついています。

学校では言葉の意味を教えるが時代とともに変わっていくし、意味も大事だがこういう意味で書いていると押し付け主張し過ぎている。しかし、そこに豊かな音と一緒に喜ぶの中に入っていける。そこを大事にして私は書いていきたい。「エブリディマジック」いたずら書きのような本ですが最後にこういう詩を書きました。好奇心と想像力と一緒に喜ぶ時に、物語が生まれる。誰にでも小さな3歳の子でも何か自分中で表現したい気持ちが生まれる。幼年童話はそういう人達を育てる橋渡しの役目をしているので私はそういう気持ちで書いていることをお話ししました。

## 講演後 角野先生との鼎談

講演会后、講師を務められた角野先生と、江津秀子園長（八幡橋幼稚園）、櫻井つた江園長（聖母幼稚園）との鼎談（ていだん）が行われた。直接角野先生と話をした江津園長、櫻井園長は「角野先生の赤い服装に魅せられ、お話ぶりにもお人柄がとてもにじみ出ていた。鼎談に向けて先生の記事などを読み実際にお会いすることができ、作家として物事に向ける思い、潔さにとっても感銘をうけた。今回、大勢の方の前でお話を伺うことができて良かった。」と話した。



第1分科会

特別研究委員会「1」

テーマ

保育の中の「謎」に迫る ～百のものを探して～

講師 | お茶の水女子大学こども園 園長 宮里 暁美 先生 会場 | TKP ガーデンシティ PREMIUM みなとみらい (5階ホールF)

特別研究委員会1(以下、特研1)は【保育の中の「謎」に迫る～百のものを探して～】というテーマで今年5月から今までの研究の成果を発表し、また各園から参加した先生が自身の保育の中で子どもが何をやっているのだろうと思う写真を持ち寄り、グループを作ってお互いに話し合いました。

先生(大人)にとっては謎でも、子どもにとっては意味がある。日々の保育の中で、時に先生(大人)の意図の元で子どもとの保育が決められてしまうこともあります。先生(大人)が子どものやっていることに目をとめ、不思議がったり、面白がったりする、その中に子どもの本当の思いや興味関心が詰まっている。そんな事を改めて考える分科

会となりました。

子どもって考えない人である、子どもってよく考える人である、etc...

(あけぼの幼稚園 橋木 元生)



第2分科会

特別研究委員会「2」

テーマ

遊びが学びになる保育環境を考える

講師 | 関東学院大学教育学部 こども発達学科 准教授 三谷 大紀先生 会場 | ワークピア横浜 (2階おしどり・くじやく)

特研2は昨年に引き続き「保育環境」を切り口として、写真や事例を持ち寄って語り合い、再び実践の中で試行錯誤しながら研究を重ねてきました。

分科会の第1部では、2園3名の先生による発表とミニシンポジウムが行われ、来場者からの質問もあって活発な議論が展開されました。

第2部では、特研2の参加者全員によるポスターセッションが行われ、身振り手振りをを用いて話す発表者の姿に、思わず立ち止まって聞き入る熱心な来場者の姿が見られました。

最後に三谷先生によるまとめと、乳児の事例に基づく考察の時間もあって、参加者、来場者が一

体となって学びを実感できた大変有意義な時間となりました。

(寺尾幼稚園 亀井 以佐久)



第3分科会

特別研究委員会「3」

テーマ

障がいのある子どもやかかわりの難しい子どもの保育を考える

～子どもの理解と保育者の支援～

講師 | 玉川大学教育学部乳幼児発達学科 教授 会場 | 神奈川産業振興センター (13階第1・第2会議室)  
四季の森幼稚園 園長 若月 芳浩 先生

特研3では、1年を通して参加者が対象の子どもを決めて継続的に観察し、記録をしてきました。4・5人のグループに分かれ、関わりが難しい子の気持ちをどこまで受け止めるか・子どもが主体的に遊んでいるのかを個々の育ちや保育のあり方を話し合い見直してきました。後半は、テーマごとのグループを作り、グループ内で語り合い、取り組んできた事例をもとにポスターを作成しました。当日は代表の3グループが発表を行い、また他のグループもポスターセッションを行いました。

「子どもが何に困っているのか?」を感じ取り、また子どもに寄り添い、理解してもらった子どもが

主体的な発揮をした事例などを聞いたことで、障害のある子どもに合わせた保育のあり方を見直す時間になったと思います。(飯島幼稚園 三橋 賢次)



第4分科会

西支部

テーマ

子どももアートも明日が好き

～廃材と出会う子どもたち～

講師 元横浜市立小学校校長  
造形をもちあげる会会長 佐々木 孝先生

会場 TKP ガーデンシティ PREMIUM みなとみらい (5階ホールE)

「廃材」は、子どもたちにとって魅力的な宝物です。今回は、その宝物を使って繰り広げられた3つの事例の発表のほか、西区7園の事例について全体研修会で作ったイメージマップや活動をポスターセッションしました。内容の中心は、子どもたちがアイデアを創出する場面や友だちとの関わりを深める姿、お互いに育ちあう姿であり、その姿から共感し学んだことは保育者の環境設定や言葉かけの大切さでした。

講師の佐々木先生の「表現とは心地よいこと。技法とは表現が増すこと」というコメントから、子どものしぐさや振る舞いに耳を傾け自然素材や

身近な材料の声を聴くことが大切であり、“子どもたちの造形活動に敬意を持つ”ことの重要性を学びました。

(杉之子幼稚園 鈴木 直美)



第5分科会

港南支部

テーマ

関係性の意味を探る

～1人の子どもの姿をエピソードから読み取る～

講師 お茶の水女子大学附属幼稚園 副園長 上坂元 絵里先生 会場 横浜ワールドポーターズ (6階イベントホールB)

子ども一人一人の思いをどのように理解するかをこの研修会で皆さんと共有できたらと思います。

3歳児の自己の欲求をしっかりと受け止める保育者の姿や4歳児の自己の要求と求められている姿との間で悩んだり苦しんだりする姿、5歳児ではかけがえのない友だちとのやり取りが自分を励まし、友だちとの関係性の中でより自分を育てていく姿など、実践発表が子どもたちの発達の物語を紡ぐ発表になったのではと思います。

園での何気ない子どもたちのつぶやきや心のありようを私たち保育者がしっかりと受け取ることで、子どもたちの関係性のありようが、より子どもの

側に立ったものになることなどが出席された保育者から出され、この分科会が今後の子ども理解の一助になればと願っています。

(金井幼稚園 木都老 克彦)



第6分科会

磯子支部

テーマ

保育者のコミュニケーションスキルアップ研究

～明日から実践！素敵なコミュニケーション～

講師 セミナー・研修講師 グローイングスクウェア主宰 久保 康子先生 会場 神奈川県民ホール (6階大会議室)

保育者に期待される能力。それは保育に関する専門的な知識、技術ではありません。日々の保育や業務を通して出会う、園児や保護者、園の同僚や関連機関の方々など、関わりを持つコミュニティの中で発揮される対応力もそのひとつです。

今回は保護者対応の場面や同僚との関係で各々が自身のコミュニケーションスキルを意識するという目標を掲げ、課題の発見や解決に取り組んだ内容について、4グループが項目別に発表しました。講師の先生の講義と参加者全員によるコミュニケーションゲームも交え、会場は笑顔でいっぱいになり、実り多い時間となりました。

(根岸幼稚園 宮崎 智香子)



第7分科会

緑支部

テーマ

音楽観をひらこう 私たちの周りの音を手がかりに

～日々の保育の中で聴こえている音を探し、その音やリズムを保育に役立てよう～

講師 東京未来大学 准教授 森 薫 先生

会場 神奈川県民ホール (小ホール)

音楽ってなに？音楽をしている人は誰？歌っている人も聞いている人もみんな音楽をしている？そんな素朴な疑問から日常の中に溢れている音や音楽を探します。子どもたちが発する声や手拍子、体を動かすと同時に口から洩れる掛け声も音楽！音を感じ取ることに着目し、感じた音やリズムを日々の保育活動に活かしていく方法を紹介します。

指導者（演者）と子どもたち（聞き手）が最初から一緒に楽しめるミュージッキングを探して手や体を動かします。わらべうたやお手合わせ（せっせっせーのよいよいよい）はそんな幼児期の音楽表現、つまり快感情の発露になります。ちょっとした工夫を知ること、音楽を構えずに日々の保

育の中に展開していくことを学びます。  
(ながつた幼稚園 笠原 逸子)



第8分科会

都筑支部

テーマ

気になる子どもと母親の育児支援

講師 元白百合女子大学講師  
東京ユング研究会相談室カウンセラー 早乙女 紀代美 先生

会場 神奈川産業振興センター  
(14階多目的ホール)

都筑支部ではクラスの中の気になる子について各園事例を持ち寄り講師の早乙女先生に助言を頂き、子どものケア・保護者のケアについて学びを深めてきました。保護者のケアでは提案や説得をするのではなく対話を通して家庭の背景を知り、理解を深め受け止めることの重要性を学びました。

気持ちにゆとりが持てるようになることで子どもの生まれ持つ個性を認め肯定出来る様になり、保護者のケアが子どものケアに繋がるといこと、保育者は子どものタイプを理解し、関わり方を工夫する必要性があると感じました。

最後に講師より心を理解することが大切だとお

話を頂き、保育者としての在り方を改めて見つめなおす機会になりました。

(認定こども園やまゆりキッズ  
横浜みずほ幼稚園 松本 祐衣)



第9分科会

戸塚支部

テーマ

子どものあふれる表現を求めて ～アートによる体感保育～

講師 芸術による教育の会  
笠木 桃子 先生 / 三石 恒夫 先生 / 後藤 和人 先生

会場 横浜ワールドポーターズ (6階イベントホール A)

「子ども達のイキイキとした表現を引き出した」「想像性豊かな子ども達を育てるためにはどのように援助すれば良いか」を考え、日常の生活から、あそび、経験、体験、といった体感を通して子ども達の「やりたい、やってみたい」という思いを引き出す保育を目指し、各園で風、海、粘土、秋をテーマに事例を持ち寄り話し合いました。芸術による教育の会の講師の方々から場所や空間全体を作品として体験（インスタレーション）する表現活動を学び、各園で実践した活動から子ども達の心が感じて動く様子や、ありのまま素直に絵や形に表現している姿をポスターセッションで共有

しました。子どもの表現に対し保育者は評価ではなく、子ども一人ひとりに共感し、情緒的なほめ言葉をかけてあげることが豊かな表現力を育むと感じる実りある時間となりました。(東俣野幼稚園 川戸 俊一郎)



# 「みてみたい」「やってみみたい」を大切に

福音館書店 月刊誌編集部部長 石倉知直

皆様は、子どもたちと科学絵本をどのように楽しんでいらっしゃいますか？

私は昨年まで15年にわたり月刊絵本「ちいさなかがくのとも」の編集に携わってきました。4歳前後の子どもたちを対象にした科学絵本です。

科学絵本は“現実の世界”を描きます。草、木、虫、石、水、光、空、雲、風……そうした森羅万象の中から、伝え方次第で子どもたちが関心をもてるものをテーマに選び、「ほら、ここにこんなにおもしろいものがあるよ」「こんなにふしぎなことがあるよ」と呼びかけていくものが、科学絵本です。

『ぐりとぐら』や『ぐるんぱのようちえん』のように「物語」を楽しむ絵本は、子どもたちの想像する力を育み、その想像力によって世界をより広く豊かに感じさせてくれます。一方、科学絵本は、今生きている現実の世界への関心を引き出しながら、心惹かれる対象を身のまわりに1つ1つ増やしてくれるものです。現実と想像の世界を行き来しながら日々を生活している子どもたちにとって、どちらも重要な意味をもっています。

これまで多くの科学絵本を編集してまいりましたが、変わらず大切にしているのは、絵本を読んでもらった子どもの中に「みてみたい」「やってみみたい」「もっとしりたい」という気持ちが芽生えるか、という視点です。そういう絵本を届けることができれば、子どもは好奇心の赴くまま、「みてみよう！」「やってみよう！」「もっとしろう！」と行動をはじめます。1冊の絵本をきっかけに、出会いが生まれ、発見が生まれ、体験が生まれていくわけです。実体験を通して得る知識は“本物”ですから、子どもの中にしっかり根をおろします。昨年担当した『はっばのうえに』は、テントウムシの蛹とその羽化を描いた絵本でした。皆様はテントウムシの蛹をご覧になったことがあるでしょうか？黄色と黒のまだら模様で、形は植物のタネか虫こぶのよう……とても生き物には見えません。そんな得体のしれないものから、お馴染みのテントウムシが姿を現すのですから、初めて知る子どもたちの驚きといたら……！

この『はっばのうえに』を作るにあたり、作者の館野鴻さんは草むらで数多くの蛹を採取し、羽化の観察を行いました。絵本に登場するテントウムシは「ナナホシテントウ」ですが、実は、取材を始めた時点では「ナミテントウ」という別の種類を登場させる予定でした。なぜ変更が生じたかということ、取材を進める過程で館野さんがあるこ

とに気づいたためです。それは、春先は普通に見られたナミテントウが、春の深まりとともに草むらから姿を消す、ということでした。その後、ナミテントウが見つかったのは樹木の枝葉。餌となるアブラムシが樹木に発生するタイミングに合わせて移動を行い、ナナホシテントウと棲み分けを行っていたのです。館野さんはすでにナミテントウの羽化を念入りに観察し、スケッチも終えていたのですが、「出会いを大切に考えている絵本なのだから、春以降も子どもの眼差しの先にいるナナホシテントウに変えましょう」と、再び最初から観察をはじめました。丁寧に取材し、自身の目で見つめなければ、わからないことがあるということでした。

私は子どもの頃から虫やちいさな生きものが好きでした。それは今も変わりませんが、同様に植物や石ころに対しても特別な関心を抱いていたかという、そういうわけではありません。しかし、科学絵本を何冊も編集している間に、気がつけば植物や石ころに対しても、深い愛着を抱くようになっていました。今、私のデスクの引き出しや、自宅の本棚には、あちこちで拾い集めた木の実や石ころ、貝がらなどがいっぱい並んでいます。きっと絵本を作っていく過程で、私たち編集者は子どもたちよりもひと足はやく、身のまわりに存在するものの魅力にあらためて気づかされているのでしょう。

子どもたちが、身のまわりの不思議なもの、美しいものの存在に、まだ気づいていないとしたら、ぜひ皆様の方でつないであげてください。その時、科学絵本がお手伝いできることがきっとあると信じています。



子育て教育  
相談室より

だいじょうぶ



横浜市幼稚園協会 子育て教育相談員 鈴木 由美子

春も近づき、もうすぐ新しい学年新しい学校へとステップアップの時ですね。

赤ちゃんのしっぽがまだついていたような年少さんも、一年たって随分しっかりとしてきたことでしょ。自分でできることもうんと増えて、おしゃべりも上手になってきたでしょう。年中さんは、お友だちとの様々なかかわりの中で、自分で頑張る力、自分を励まして粘り強く繰り返す力を育ててきていることでしょう。「いやだけど 使いたいなら貸してあげる」など、相手の気持ちもわかり始めて、相手への思いやりも出てきているでしょう。

年長さんはいよいよ、卒園して小学校という新しい世界へ船出していく時ですね。広い学校の中で、新しいお友だち、新しい先生と時間割の決まったお勉強生活が始まるわけですね。幼稚園の3年間で自分の身の回りのことは一通りできるようになっていることでしょう。先生の言われることも一生懸命聞こうとできているでしょう。それでも、初めてのことばかりなので、とても心配だと思います。子ども自身が不安な時、大人はしっかり受け止めてにっこりして「だいじょうぶ」と言ってあげてください。「そんなことじゃ小学校行けませんよ」とか「小学生になるのに、そんなことしたら笑われますよ」などの脅しはご注意ください。大人は励ましのつもりでも子どもは一層不安になって、できることまでできなくなってしまいます。思い出してみてください。お母さんお父さんが一年生になったとき、あるいは就職して新しい世界に入ったとき、とても緊張しませんでしたか？そんな時、笑顔で「あなたならだいじょうぶ」と言ってくれた人がいたのではないのでしょうか。

新しいこと尽くしの一年生、お母さんもいろいろとわからないこと不安なことがあるでしょう。大人はいろいろと調べたり、人に聞いたりすることができます。ぜひ、まずお母さんがご自分の不安をへらして、小学校生活について理解してください。お子さんに、「こんなことするんだって、楽しみね」とか、「毎日のお仕度最初は一緒にしようね」とか「〇〇ちゃんも同じ小学校だって、一緒に行けるね」など、期待と勇気をもって新しい世界へ踏み出していけるようにお話ししてあげてください。

子どもは「つ」のつくうち、といひます。家庭という第二の子宮に守られてすくすく育っている子どもたち。9つ過ぎたら、もう思春期に差し掛かります。親より、お友だちの方がよくなっていきます。なので、ぜひ今のうちに親子の絆をしっかり結んでおいてください。お母さんお父さんが笑顔で子どもに向き合うことが何より大切なのです。「ねーねーおかーさんー」「みてーみてー！」子どもたちは親の注意を自分に向けてほしいのです。兄弟が何人いても、自分だけを見てほしいのが子どもです。ぜひ、どの子ども、その子とだけ一緒に時間を取ってあげてください。そういうことができるのもいまのうちです。小さい頃に一緒に楽しんだ思い出がたくさんあれば、思春期に無口になったとしても、やがてまた話ができるようになるでしょう。子どもの人生を支えていく心の根っこはこの時期にしっかりと育てたいものです。それは「お父さんお母さんは自分を愛して守ってくれる」「愛してもらえる自分はいいやつだ」「この世の中に生きていくことは楽しい」という心理学でいう「基本的信頼感」という心です。長い人生、挫折した時に立ち直る力はこの心の根っこから生まれてきます。失敗しても「だいじょうぶ」「NICE TRY!」と受け止め「失敗は成功の母」と励ましてもらうことで子どもたちはどんどん前へ進んでいきます。どうぞ笑顔で「だいじょうぶ」とおまじないのように繰り返してあげてください。

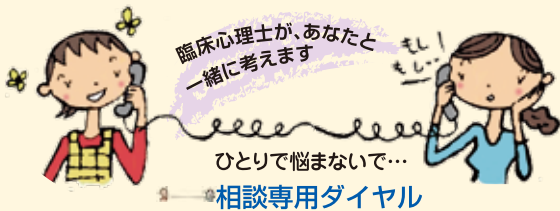
子育て教育相談室

【相談日】

毎週火曜日・金曜日（年末年始、祝祭日を除く）

【受付時間】

10時～12時 13時～15時



045-534-8837

公益社団法人 横浜市幼稚園協会  
http://www.kids-yokohama.or.jp  
TEL 045-534-8708

編集後記

令和元年度もあとわずかとなりました。沢山の体験をした子どもたちは進級・進学に向けてこころときめかせている頃です。

1月に横浜市幼稚園教育研究大会が開催されました。全体会での幼児期の読み聞かせ、自発的な読書への導きの大切さ、分科会での一年間の研究発表の様子をお届けします。日々の保育以外に各園の教職員は研究・研修を積んで教育・保育の質の向上に努めています。

広報部 柳下佳子